

那覇市立金城小学校校内研修焦点授業

(1) 単元名： 垂直・平行と四角形（第7時）

(2) 本時の目標： 平行四辺形の辺や角に着目し、平行四辺形の性質を調べる。

那覇市立金城小学校、児童数 800 名、28 クラスのマンモス校である。学びの共同体の学校改革に手を挙げて 2 年目、校長先生のリーダーシップのもと、子どもたちの学びの保証と教師たちの同僚性の構築をめざし、支え合う学校・学び合う授業づくりに邁進している。

本日は、一学期の校内研修の焦点授業として 4 年生の K 先生が教室を開いてくれた。右の写真、職員の授業観察の様子である。単純に職員の数も半端ではない、教室が狭く息苦しくなるが、子ども達なりに担任に気遣いながら自分たちで学び、先生方の学びを提供してくれている。感謝



[授業開始前の教室の風景] 理念の実践

「学びの共同体は教育理念の実践である。」佐藤学先生の言葉である。「学校は誰のためのものですか？」教師に向けられる問いではない子ども達に問う言葉である。授業前、楽しそうに教室の仲間たちと語っている。自分たちの居場所、自分たちの癒しのテリトリーとして教室の存在がある。



金城小の先生と子ども達が「学校は誰のためのものですか？」と問われたとき、「子ども達のためのものです。」「みんなが楽しく学ぶところです。」と明言できる「わたし達の学校」を目指してほしい。

[前時までの想起]：四角形の仲間・・・三角定規を使って（垂直・平行）をおさえる。



今日の学習のためにおさえておかなければならない既習確認である。

左の写真、「あれ？…どんなだった？」すぐに仲間の心が向けられて…解決した仲間は大切である。共同体は、みんなが参加し「みんなでやりとげる。」が目的の集団である。一人の困り感をみんなで癒してあげる。個人の自立より、協同的

解決に向かう仲間を育てたい。チーム（グループ）で解決に向かう意義を全教師で確認しておきたい。

[本時の課題提示]：平行四辺形の特徴は何？

授業者は前時までの学習をヒントに、平行四辺形の特徴についてグループで話し合うように課題をおろした。

[学習規律] 鉛筆がそろろう。

授業者が本時のめあてを書き始めると、子ども達が一斉に鉛筆を持って書き始めた。この行為一つからも、授業者の日常的な学習



規律へのこだわりがうかがえる。教室のルールや学習規律は大切である。深い学びは静然とした教室にしかな確立できない。教師の思いや考えが子ども心に届いているかがカギになる。

[話し合いの視点を示す]



学びに滞りを感じた授業者は、黒板前に子ども達を集めて実に小さな声で特徴をおさえる視点を話した。ボソボソささやく様に語る教師の口元に視線が集中する。グループに戻った子ども達の学びがいっきに加速する。教師の見取りとタイミングが実にいい。





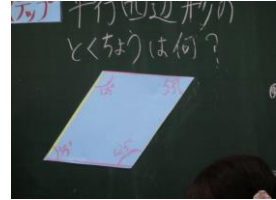
向かい合った辺が平行であることを説明するグループ。授業当初で確認した三角定規の扱い方を3名でボソボソ確認しながら説明する。「言語活動」の重要性や必要性がクローズアップされている。算数科においても、解の方法や考え方の言葉による説明である。



基本話型等も示される学校もあるが、一番大切にしたい事は、聴き手に「自分の考えが伝わったか？」である。



向かい合った角について説明するグループこちらもボソボソきき合いながら作業し説明する。どの子にも得意不得意がある、不器用な仲間の手と心を支える素敵な仲間もいる。「みんなでやりとげる」を目指したい。



[支える眼差し] 発表する側は、聴いてくれる仲間に支えられている。

ちゃんと仲間が聴いてくれるから、発言できるのである。



[きき合う・支え合う]

「なんで?」「どうやるの?」「わからん?」躊躇なくきき合う仲間と、訊かれたら寄り添い支え合う仲間たちである。素敵な関係で仲間がつながっている。誰が見ても微笑んでしまうシーンである



[金城小学校改革 2年目の壁を共有する]

1. 授業づくりの課題を明確にする。→ 学び合う授業の成立の難しさを共有する。

教師の困難・難題(アボリア)を素直に受け入れて対話する。

2. みんながやる。みんなで作る。→ 進むべきベクトルを1つにする。

学校改革はすべての児童、すべての教師の挑戦である。

3. 日常でやる。日常をやる。→ 「見せるための授業」を払拭する。

研究は日常授業で実践し、焦点授業は日常をやるように心がける。

4. 同僚性の構築 → 研究の共有。教師もきき合う 教師も困り感を共有する

教師が互いに支え合う職員室、困り感を素直に出せる職員室。

5. タスクの研究(課題・テーマ・問題) → つながることが必然となるタスクの研究

K先生お疲れ様でした。素敵な教室、素敵な仲間たちです。

本日誰よりも「学び」を獲得したのは同僚の教師達ではないでしょうか。子ども達が互いにきき合い・支え合う姿がほんとに微笑ましい授業でした。

40名近い教室の子ども達を、一人の教師で支えてあげるのには限界があります。グループでは、隣の仲間が寄り添って支えてくれます。学びの共同体の「一人残さず学習に参加する」にこだわるならば、やはりグループによる協同的な学習スタイルがいいのではないのでしょうか。最近、アクティブラーニングという言葉をよく耳にします。その意義や目的、必要性等について金城小でも検討してみてください。素敵な授業ありがとうございました。

